

| | |
|--------------|---------------------|
| 学校名 (生徒数) | 甲賀市立水口中学校 (792人) |
|--------------|---------------------|

(本研究に係る問い合わせ先)

所在地：甲賀市水口町水口 5900

電話番号：0748-62-4127

【研究の目的、研究内容】

(1) 全国学力・学習状況調査の結果から見えた課題

「知識」に関する問題、「活用」に関する問題の平均正答率はともに、全国と比べ下回った。また、正答数の分布をみると、「知識」に関する問題では、分布のピークが2つに分かれ、「活用」に関する問題では、分布のピークが全国より低い位置にある。以上のことから、「学力の二極化」と「活用する能力」が課題としてあげられる。これらの克服のため、自ら学ぶ姿勢の育成と、じっくり考える態度の育成が必要と考えた。

(2) 課題解決に向けた改善策

研究の主題「確かな学力の向上」を目指すための『学びを育てる』取組について
～自ら学ぶ生徒の育成を目指して、ねらいを明確にした授業の改善～

平成24年度から「水中共通実践10項目」を設定し、全教職員で取り組んできた。過去3年間、教職員の自己評価による意識調査をした結果、授業に臨む教職員の意識が改善され、好結果が定着している。

本年は、これらの意識変化を基盤に、次のステップへ研究を進めることにした。

「確かな学力の向上」に、より確実にアプローチするため、教える側は勿論、学ぶ側にとっても、一時間の授業において、短期・長期・将来的に「付けたい力・付けるべき力は何か」という「ねらい」を明確にして、生徒と生徒、生徒と教師、教師と教師がともに学び合う取組を展開した。

(3) 研究体制

研究推進委員会（校長、教頭、教務、副教務、研究主任、研究助任〔理科〕、教科主任）を中心に校内研究を推進する。

本研究は、この委員会の助言のもと、研究助任、理科部会を中心に進める。

(4) 1年間の主な取組の経過

- ・ 4月16日（木） 研究推進委員会 研究主題の決定
- ・ 4月21日（火） 全国学力・学習状況調査(理科実施)
- ・ 5月29日（金） 校内研究会・教科部会
教科部会での研究内容の確認と学・学テストの考察
- ・ 8月25日（火） 校内研究会・教科部会
学力アプローチ事業の研究内容の紹介
2学期以降の授業研究会の内容検討
- ・ 10月23日（金） 公開授業
3年理科「エネルギー」
力の分解・体験して予想し実験して確かめる。
- ・ 11月11日（火） 授業研究会(市授業力向上養成研修と共催)
1年理科「光・音・力による現象」
光の屈折を体験して学ぶ
- ・ 12月7日（月） 学び確認テスト(1年)実施
- ・ 12月10日（木） 学び確認テスト(2年)実施
- ・ 2月予定 校内研究会・教科部会
各教科授業研究会のまとめ

(5) 具体的な研究内容・方法、研究を進める上での工夫点等

①水中共通実践 10 項目の実践

「本時のねらい」の明示、ねらいに迫る中心発問、中心活動の明確化、ねらいに迫る発言・反応をひらう授業展開の工夫
(水中共通実践 10 項目については、昨年、一昨年の報告書を参照して下さい。)

②自ら課題に取り組む姿勢を育む工夫

- a. 体験をふまえた予想の設定。
- b. 少人数で行う観察・実験の設定。

③自分の考えをまとめ、表現する力を育む工夫

- a. 意見交流ができるグループ討論の設定。
- b. 国語科との連携。
- c. 定期テストの問題作成の工夫。

【研究成果と課題】

(1) 研究成果

- ①全校の取組として行ったが、特に理科では、昨年他教科で行っていた授業展開を明示する工夫を取り入れたことで、授業で何を学ぶのか意識して取り組めるようになった。
また、活動内容をマークを利用して、黒板やプリントに示した。これにより、何の活動をしているのか明確になり、生徒の活動も活発化した。
- ②ねらいに迫るためには、自分の考えを持ち観察・実験にのぞむ必要があるが、生活体験から予想させる場合も、その体験が少なく予想の根拠がない場合が多い。そのため、観察・実験に関わる体験をさせ、根拠を持たせて予想させるようにした。結果がでたときに、「やっぱり」「なぜちがうの」という発言が多く聞かれた。
- ③C B (コミュニケーションボード) を利用し、班での話し合い活動を進めてきた。体験をともなう予想と 4 Q S の利用で、考察のポイントが明確になった。
また、国語科の指導内容に合わせて、考察の指導を行う試みを行ったところ、国語科の学習を思い出しながら考察を書くことができた。
定期テストの問題作成について、教科部会で研修を行い、考えを表現する問題を取り入れた。それぞれが持つ経験や知識を出し合うことで、若手教員だけでなくすべての教員にとってよい研修となった。

(2) 課題等

- ①授業展開の明示は効果的であったが、実験手順を考える授業等では取り入れなかった。
生徒は授業展開が明示された方が理解度は上がるが、内容によって取り入れるか検討が必要である。
マークの利用は、個人の取組であり、教科、全校で共通のものを利用できていない。本校は、理科だけでも 6 名の教員が担当している。生徒の立場から考えても、実践を重ねて有効なものを共通して利用できるようにしたい。
- ②複数の単元で、体験をさせ予想をたてる展開が考えられたが、生徒がどのような生活体験があるのか、その状況を調査したわけではない。学習(予想をたてるの)に必要な生活体験の項目を設定し、その有無を問う調査紙を作成して調査する必要がある。
その結果をもとに、有効な体験を取り入れた授業展開を考えたい。
- ③以前より言語活動を行うにあたり、国語科との協力は必要であると感じていた。今回は国語科の指導内容を聞き、その内容と合わせて思考手順や表現手順を考えたが、今後他教科との連携も考えたい。
教科内では、問題作成の研修会だけでなく、研究授業のために教材開発や予備実験、模擬実験などで意見交流する場が設けられた。このような学年間、教科間を越えた交流は必要だと考える。今後も全体の研修として続けられるようにしたい。